# その往(ゆ)くところ、人は続き道は拓(ひら)かれてゆく

清水　寛

「藤本文朗先生の研究業績や先生の“仕事師”としての社会的役割を書いてくださる方」に寄稿を「お願いしたいのですが、…とお聞きしたところ」筆者にということですので宜しくという趣旨の依頼状をいただいた。私がそのように大きな、そして重要な課題を受けとめることが出来るとは思っていない。ただ、「テーマ（仮）」に「全障研を立ち上げる」とあったので、「お引き受けいたします。」と返信した。

2003年3月、『座して障害者と語る　藤本文朗退官記念論集』（文理閣）が刊行されたとき、「第7部　退官に寄せて」のなかで、私は「時代の課題に鋭敏にとりくむ卓越した研究運動の組織者」と題して、その類ない先見性と行動力、組織力について指摘するとともに、全障研運動の創造と発展に果たしてきた役割についても記した。しかし、紙幅の制約上、そのごく一端にしか触れえなかった。

そこで、今回は、もう少し詳しく、具体的に、当時の第一資料を用いて書き留めておきたく思う。

ところで、藤本文朗さんは東京教育大学教育学部特殊教育学科の第五期生で私の一学年先輩であり、それ以来52年間、ずっと敬愛の念をこめて、ぶんろうさんと呼ばせていただいている。そこで拙稿でも、そう呼ばせていただく。

さて、周知のように、全国障害者問題研究会は1967年8月1日、東京で結成された。会の「目的」は「障害者の権利を守り、発達を保障するために、理論と実践を統一的にとらえた自主的・民主的研究運動を発展させること」（会則第3条）にある。

この全障研の組織化の一つの大きな起点となったのが、1966年7月30日～31日、京都教育文化センターで開かれた「心身障害児教育研究運動をすすめる会、第一回世話人合宿会」である。「発起人」は田中昌人・清水寛・藤本文朗・永田一視であり、「合宿会の呼びかけ」の文を、ぶんろうさんと私とが書いた（「合宿研」への案内文全体は孔版印刷、B4判2枚）。「呼びかけ」文の字数は約850字。読みかえすと、当初は全国的規模の民間障害児教育研究団体を志向していたことが分かるが、その後の全障研運動の課題と方向を指し示す面も有しているので次に抄記する。

「戦後二〇年日本の障害児の教育や福祉は、障害児やその父母たちの切実な要求や運動、教師たちの実践によって、発達の方向をたどってきました。

その中で、障害児の問題に対する研究も数多くなされてきており、それらは、障害児問題の解明や、社会的啓蒙に、それなりに一定の貢献をしてきています。しかしそれらの研究にはいまだに障害児教育の現場の矛盾から遊離し、また障害児や父母の要求に真に答えていないものも多くあります。

『民主国家、福祉国家建設』の一環として、障害児の福祉・教育は『飛躍的に発展した』とよくいわれますが、質的にみても、とりわけ重症心身障害児に対しての社会保障はきわめて遅れています。そして特殊教育の振興政策は、それらから切り捨てられた子どもに対して新たな差別問題を生みだしています。

このことは、政府が独占資本の要求にこたえて教育の軍国主義化、反動化をすすめていることと関連してますますきびしくなっています。（略）これに対して研究者は十分答える体制にあるとはいえません。

過去の障害児教育の発展を阻害し、障害児の幸せをふみにじってきたものは戦争と貧困を生みだしてきたものとその根源を同じくしています。（略）このような考えを持った若い民主的な研究者が、自分の研究成果をもちより、膝をまじえて話しあう機会をもつ目的でこの会を呼びかけたわけです。（略）」

この「合宿会」でぶんろうさん（福井大学）は、「日本における心身障害児教育運動」という共通テーマのもとに、その後「ハスの実の家」の障害者の生活と権利を守る運動として知られる親たちの地域活動など注目すべき報告を行った。また、ぶんろうさんが司会し

たパネルディスカッション「心身障害児の発達の可能性とその教育」では、田中昌人さん（近江学園研究部）が、近江学園での実践・研究と滋賀、大阪で発足していた「発達保障研究会」での学習活動などの成果にもとづき発達保障論について熱をこめて詳述し、私たちがめざす研究運動の性格・方向と未来への展望を力強く示唆した。

この「合宿会」の討議を通して、会の名称は「全国心身障害児教育研究」（略称は「全障研」）とする、教育の分野だけではなく社会福祉の分野の教職員を含め広く会員となることを呼びかけていく、旧来のような「実践者」と「研究者」の区別をなくし、共に活動していくなかで実践的な研究集団をつくっていくことなどを確認した。

その後、1966年12月27日～28日、東京で「全障研」結成準備委員会主催による「第二回障害児（者）教育研究集会」が開かれ延べ人数で282人が参加した。その成果にたって、1967年に入ると夏の結成大会に向けて三つの地区（ブロック）が互いに連携しながら結成準備集会を開いていった。その際、関東ブロックでは会則の原案、近畿ブロックでは障害児（者）の生活と権利をめぐる情勢を含めての基調報告案、北陸ブロックでは研究運動の方針案の作成を担当した。

北陸ブロックは、1966年5月5日、福井市で、「差別の実態を明らかにして、それをいかに克服するか」をテーマに開催された。集会準備委員長の役はぶんろうさんが担った。参加者は50人（福井27、石川17、富山4）、その内訳は教職員35人、学生・父母など15人で、全体として若い人たちのエネルギーに溢れた集会であったという（「全障研」結成準備委員会事務局編『全障研ニュース』第3号、1967年6月、より）。

なお、当時、私は東京教育大学の大学院生であったが、東京に在住しているからということもあってか、「全障研」結成準備委員会の委員長をさせていただき、ぶんろうさんとも連絡をとりあって共に運動にとりくんでいった。

こうした経過をへて、全国障害者問題研究は1967年8月に、アメリカの統治下にあった沖縄を含め全国から約400人余が参加して発足した。ぶんろうさんは結成準備委員会を代表して「今後の運動の進め方」を提案し了承され、その後の全障研の運動論・組織論の基礎を築いた。第一回総会で役員がブロック別に選出され、北陸ブロックからはぶんろうさんのほか、青木達雄（福井・ハスの実の家）さん、金田利子（新潟県立新潟女子短期大学）さんが全国委員となり、全障研運動の推進力となっていった。

全障研結成後のぶんろうさんの研究活動では、とくに、在宅不就学障害児の家庭への訪問調査活動を通じてその実態と「就学猶予・免除」体制の不当性を明らかにし、どのように障害の重い子どもにも教育権を保障していく運動において先駆的な役割を果たしたことが広く知られている。

日本教育学会は第27～29回大会（1968～70年）において三か年連続して初めて課題研究として「障害児の教育を受ける権利」を設定した。ぶんろうさんと私たちはその意義を積極的に受けとめ、全障研の会員たちと「障害児の教育権」研究グループを組織し、発達保障の立場にたつ「権利としての障害児教育」の実践・研究・運動の発展をめざして共同研究を行い毎年度の大会で発表した。その成果が評価されたこともあって、学会の機関誌『教育学研究』第36巻第1号（1969年3月）は初めて「障害児教育」を特集した。先のグループからは5人の論文が掲載され、ぶんろうさんは「障害児の教育権保障の実態と運動―未就学障害児を中心に―」を発表した。その内容は1967年6～12月、福井県鯖江市において、ぶんろうさんと知的障害の子の父親で「育成会」の役員として保護者の相談活動をしてこられた奥田懇さんとが中心になって、在宅不就学障害児（者）の家庭を一戸一戸訪問して、その深刻な実態と父母の切実な要求を調査するとともに、調査活動を通じて生まれていった＜日曜教室＞の実践や「鯖江市障害児を守る会」の行政側への要求などを報告したものであった。ぶんろうさんはこの論文を次のように結んでいる。すなわち、

「障害児のおかれている現状は明治以来、未就学、就学にかかわらず、全体として、『収容される残酷さと、放任される残酷さにある』といえよう。それは同時に、人民の差別の集中的な表現であると考えられよう。その意味で、障害児の発達を保障する運動、教育権復権の運動について、十分討議されるべき」である、と。

3年間にわたる課題研究にたいする私たちの共同研究グループによる学会報告は、『「権利としての障害児教育」試論Ⅰ』（1969年7月、活版印刷、全58頁）、『同Ⅱ』（1970年2月、タイプ印刷、全35頁）、『同Ⅲ』（1971年1月、タイプ印刷、全50頁）としてまとめられ、各年度の全障研全国大会、日教組・日高教教育研究全国

集会「障害児教育分科会」などで自主販売され、全国各地の障害児の不就学をなくし障害の重い子どもたちに教育・福祉・医療等への権利を総合的に保障していく運動をおし進め、発達保障の立場にたつ「権利としての障害児教育」の実践と理論を深め広げていく上で重要な役割を担った。

その後、ぶんろうさんは前掲論文をさらに実証的に深めた論文「不就学障害児の死亡例の実態調査研究」を『教育学研究』第41巻第1号（1974年1月）に発表し学会や民間運動に大きな影響を与えた。

そして、私たちは障害児の不就学をなくし教育権を保障していく運動や、さらに養護学校義務制を民主的に、かつ完全に実現させていくことをめざして、著作権活動にも協力・共同してとりくんでいった。例えば、『障害児の教育権保障』(清水寛・三島敏男編、明治図書、1975年。ぶんろうさんは「第二章　障害者教育の思想」の「第一節　『特殊教育』論批判」を執筆)、『この子らの生命輝く日―障害児に学校を―』（河添邦俊・清水寛・藤本文朗著、新日本新書、新日本出版社、1974年。ぶんろうさんは「1　学校へ行きたい―障害にとって学校とは―」「2　学校にはいれなかった障害児」を執筆。刊行後2年余で約3万部発行)、『障害児と学校』（同前、1979年。ぶんろうさんは「第一章　1979年義務制実施を起点に」「第三章　障害児の発達と環境―教育環境論にむけて―」を執筆）などである。

以上で、ぶんろうさんの研究活動について、全障研運動の発足前後の時期の、特に障害児の不就学をなくし教育権を保障するとりくみに焦点をあてて述べた。

ぶんろうさんの計5つの大学での50年間におよぶ研究・教育活動、社会的諸活動、さらには長年にわたってとりくみ国際的にも高く評価されているベトナムの障害者教育・福祉などへの支援と交流の活動等々。ぶんろうさんの活動は実に多彩であり、しかもいずれも先進的で創造性に富んでいる。それらの多方面にわたる実践・研究・運動の基盤につらぬかれているのは、ぶんろうさん自身が自らの歩みをふりかえって総括しているように、「研究法として探求した“教育臨床的研究”の方法論」である（藤本文朗「床に臨んで教育を考えるとは」『座して障害者と語る』所収)。いつぞや、ぶんろうさんがご病気となり入院したことがあった。幸いリハビリも適切・有効であったようでほどなく退院した。その時、ぶんろうさんは自分が陥った症状、治療と回復の過程を詳しく記録し、その患者としての内面も含めて冷静に分析し自己省察して研究論文にまとめ、その別刷を贈って下さった。私はその内容に示唆されるところが多かっただけでなく、なによりもぶんろうさんが実践的に探求してきた「教育臨床的方法」が他者にたいしてだけでなく自らをも対象として為されていること、自分の生き方にもつらぬいておられることに深い感銘を受けた。

魯迅（1881～1936年）が自らの生いたちなどを描いた小説『故郷』の結びに、希望とは道のようなものだ、初めから有るとも言えないしないとも言えない、そこを歩く人が多くなってつくられていくのだからという趣旨の言葉がある。ぶんろうさんの半生記にわたる果敢で、心こまやかな、そして多くの人たちと連帯して、ねばりづよく社会の障壁に挑戦し乗り越えていく姿を見ると、私は魯迅が希望という言葉を道になぞらえて語ろうとしたことの眞実であることを思わずにはいられない。

ぶんろうさんの往くところ、その人柄に魅せられ、進む方向の正しさに共感して集う人たちの輪は広がり、どんなに困難であろうとも人間らしい社会を築きあげていくために必要な道が拓かれていく。

久しぶりに生まれ故郷、京都の家に帰ってきたぶんろうさん。ベスト・パートナーである貞子さんともども一息入れて、再び、お二人ならではの新しい未来への歩みを始めていくであろうことを、心から期待し確信している。

2008年8月30日、記。

（しみず ひろし　埼玉大学名誉教授、全国障害者問題研究会顧問）

参考文献

（1）、退官記念論集編集委員会編、2000年3月『座して障害者と語る　藤本文朗退官記念論集』文理閣、全334頁。

（2）、清水寛、1997年11月「記念論文2　全障研運動の創造―『全障研』結成準備会時代から第三回全国大会まで―」全国障害者問題研究会出版部、578～720頁。

（3）、清水寛「証言『発達の必要に応じて』の教育条理解釈の提起をめぐって」障害者問題研究編集委員会編集、2008年5月『障害者問題研究』第36巻第1号（通巻133号)、55～65頁。